

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 18 日現在

| |
|---|
| 機関番号：33501 |
| 研究種目：若手研究(B) |
| 研究期間：2011～2012 |
| 課題番号：23730631 |
| 研究課題名（和文）パピーウォーカー経験による心理的効果と介在教育プログラムの検討 |
| 研究課題名（英文）The Psychological Benefits of Puppy Walker Experience and Development of Animal Assisted Education Programs. |
| 研究代表者 濱野 佐代子 (HAMANO SAYOKO) 帝京科学大学・こども学部・准教授 |
| 研究者番号：90413137 |

研究成果の概要（和文）：パピーウォーカー経験による心理的効果を明らかにし、介在教育プログラムの構築を目的として調査を実施した。日本盲導犬協会が行っているウィークエンドパピーウォーカーを対象に面接調査を行い、ボランティア経験による心理的効果について検討した。また、同協会の研究協力者とチームを構成して、キャリアチェンジ犬（引退犬を含む）を用いた動物介在教育の可能性を検討した。以上の結果から、キャリアチェンジ犬介在教育プログラムについて考察した。

研究成果の概要（英文）：The primary purpose of this study was to clarify the psychological benefits of the puppy walker experience. The secondary purpose of it was to develop animal assisted education programs. In this study, the weekend puppy walkers from the Japan guide dog association were interviewed, and the data was analyzed about the psychological benefits of the volunteer experience. Also, the possibility of carrier change dog (including guide dog of retirement) assisted education programs were considered by the expert team which this author and members of the association belong to. Based on the results, the carrier change dog assisted education programs were discussed.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|-------|-----------|---------|-----------|
| 交付決定額 | 2,200,000 | 660,000 | 2,860,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育心理学

キーワード：パピーウォーカー、盲導犬、キャリアチェンジ犬、動物介在教育、ボランティア、アニマルセラピー、犬、愛着

1. 研究開始当初の背景

盲導犬は、視覚障がい者の目の変わりになるだけでなく大切なパートナーとなっている。盲導犬は、視覚障がい者に譲渡されるため、育成は基本的にボランティアで成り立っている。そのため、盲導犬育成には、寄付をはじめ多くのボランティアが必要とされている。その中の一つに、パピーウォーカーのボランティアがある。パピーウォーカーとは、

盲導犬候補のパピー（以下パピー）を盲導犬協会から委託され、訓練センターに入所するまでの約 10 ヶ月間にわたり、パピーを家庭で育成するボランティアのことである。このパピーウォーカーは、盲導犬育成に貢献するだけでなく、パピーを受け入れる家族に多大な影響を与えていると考えられる。

人と盲導犬の関係の研究においては、盲導犬への意識の調査や、盲導犬を使用している

視覚障がい者と盲導犬の関係の研究、パピーと飼育者の親和的な社会的相互作用の行動学的視点に基づいた研究はあるが、パピーウォーカー経験による心理学的な影響に関する研究はほとんどなかった。

そこで筆者は、「パピーウォーカー経験が家族関係に与える影響-盲導犬候補子犬の育成と別れ」(若手研究(B): H20~21、課題20730439)について縦断的に調査を行った。その結果から、パピーウォーカーのボランティアを行うことによって、家族がまとまり、家庭での話題が増え、ストレスが軽減され、喧嘩が減り、障がい者のことを考えるようになり、パピーとの別れの悲しみを乗り越えることで、家族関係が以前より親密になったことが分かった。また、子どもたちは、人生初めての愛着対象の喪失を経験する。そのことは、パピーとずっと一緒に暮らしたいという欲求を抑制し、盲導犬を待つ視覚障がい者のために別れを受け入れる。このようなパピーウォーカー経験が、子どもたちの共感性や責任感、忍耐力等の心の発達に重要な影響を与えることを明らかにした。

一方、動物飼育の利点として、心理的利益、社会的利益、身体的利益がある。このような効果を期待して、高齢者施設や病院、子どもの心理的治療教育の現場で動物を用いて行うのがアニマルセラピー(動物介在活動や療法)である。さらに、最近では、教育場面に動物を介在させ、動物とのふれあいを通して、子どもたちの心理社会的な発達や人格的成長を促し、生命尊重の教育を行うための動物介在教育が行われてきている。人と動物との相互作用に関する国際機関である International Association Human-Animal Interaction Organizations でも、教育場面へのペットの導入についてのガイドラインが宣言された。筆者も幼稚園における動物飼育による幼児の心理社会的な発達への肯定的な影響を明らかにしてきた(濱野, 2008)。

また、盲導犬育成事業では、盲導犬啓発活動犬やパピーを介在させた教育活動や、受刑者のための教育プログラムの活動がある。公益財団法人日本盲導犬協会は、受刑者が盲導犬候補のパピーを育成する「島根あさひ盲導犬パピープロジェクト」を行っている。これは、平日は、受刑者がパピーを社会復帰促進センターの中で育成し、週末に地域のボランティアであるウィークエンドパピーウォーカーが家庭で育てるプロジェクトである。ウィークエンドパピーウォーカーと共に受刑者が盲導犬のパピーを育成することにより、受刑者の社会復帰の促進を期待している(日本盲導犬協会, 2013)。

一方、パピーは盲導犬訓練センターに戻った後、訓練を受け盲導犬適性を評価される。その中で、盲導犬になる犬以外は、一部は盲導犬啓発活動犬となるが、ほとんどがキャリアアチェンジ犬として家庭に引き取られペットとなる。

盲導犬に適さないパピーも血統や気質は良い犬であり、盲導犬以外の活動に適する犬が存在すると考えられる。また、何らかの理由で、盲導犬を早期に引退した犬がいる。そこで、このキャリアアチェンジ犬(早期引退犬を含む)とその家族のボランティア力を有用したキャリアアチェンジ犬介在教育プログラムの開発を行うことを目的とした。

2. 研究の目的

本研究では、以上の動向における自身の研究を発展させて、パピーウォーカーやウィークエンドパピーウォーカーを対象とした調査や、盲導犬育成事業におけるプロジェクトの調査を行い、パピーウォーカー経験による心理的効果の検討と、キャリアアチェンジ犬(早期引退犬を含む)を用いた動物介在教育プログラムの構築をすることを目的とした。

具体的には、以下の3つの調査を行うことによって、動物介在教育プログラムについて考察することを目的とする。

①パピーウォーカー家族のパピーへの愛着と、飼い主のペットへの愛着を比較して、パピーウォーカー経験による心理的効果について検討した。

②日本盲導犬協会が行っている「島根あさひ盲導犬パピープロジェクト」におけるウィークエンドパピーウォーカーを対象に調査を行い、ウィークエンドパピーウォーカー経験による心理的効果の検討を行った。

③著者と日本盲導犬協会の研究協力者で専門家チームを構成して、キャリアアチェンジ犬の介在教育の可能性の検討を行った。

以上の調査から、キャリアアチェンジ犬を用いた動物介在教育プログラムの構築を目的とした。

3. 研究の方法

公益財団法人日本盲導犬協会の協力を得て、以下の3つの調査を実施した。

①の調査では、パピーウォーカーとペットの飼い主434名を対象に、人とコンパニオンアニマル(犬)の愛着尺度(2002)の一部を用いて質問紙調査を行った。この愛着尺度は6因子34項目からなる尺度であるが、特に、パピーウォーカーの家族とパピーの関係に重要であると考えられる「社会相互作用促進」と「養護性」の因子の計10の項目を使用した。

②の調査では、ウィークエンドパピーウォ

ーカーの家族を対象として、ウィークエンドパピーウォーカー経験についての調査を行った。現在ウィークエンドパピーウォーカーを行っている、もしくは行っていた家族で、調査を承諾してくれた6組の家族11人を対象に面接調査を行った。調査協力者は、ウィークエンドパピーウォーカーボランティアを希望した本人とその家族であった。

調査協力者に半構造化面接調査を行った。調査協力者に対しては、面接実施前に、本研究の目的、面接内容のICレコーダ録音の承諾やプライバシー保護等に関する説明を書面にて行い、家族代表者に面接承諾書に署名してもらった。面接場所は、各家庭か訓練センターの1室、静かな場所にて行った。家族ごとに面接調査を行い、質問に応じて、一人一人を指名して回答してもらった。面接者は全て著者自身である。面接時間は約40分から60分であった。会話はICレコーダーに録音し逐語録データを作成した。

面接調査内容は、パピーとの関係やウィークエンドパピーウォーカー経験による心理的影響についてであった。

③の調査では、著者と日本盲導犬協会の協会の本研究協力者とで構成される専門家チームを構成し、キャリアチェンジ犬と、その犬をひきとって介在教育を行うボランティアの検討を行い、キャリアチェンジ犬の介在教育のプログラムの可能性を検討した。

4. 研究成果

①の調査では、ペットの飼い主よりもパピーウォーカーの方が、社会との関係の広がりへの貢献、人と人との関係を促進する役割、家族をつなぐ役割を強く意識すると考えられた。また、ペットの飼い主よりもパピーウォーカーの方が、養護する能力が身につくことが明らかにされた。

②の調査では、ウィークエンドパピーウォーカーを対象とした面接調査を行った。「パピーウォーカー経験が家族関係に与える影響-盲導犬候補子犬の育成と別れ」(若手研究(B):H20~21、課題番号20730439)の調査結果と同様に、家族がまとまり、家庭での話題が増え、ストレスが軽減されるという結果が明らかにされた。また、視覚障がい者のことを考えるようになったり、社会貢献に参加しているという意識が認められた。

以上の結果から、ウィークエンドパピーウォーカーもパピーウォーカーと同様に、家族関係が凝集される経験であり、社会貢献に参加できる経験であると考えられた。したがって、どちらのパピーウォーカーの経験も盲導犬育成に貢献するだけでなく、ボランティアを行う側の心理的利益も得られるという

ことが考えられた。

一方、ウィークエンドパピーウォーカーに特有の結果としては、受刑者と共にパピーを育てているという一体感が得られること、感情の共有が得られるということが分かった。さらに、受刑者の気持ちの推測も行っていた。これは、ウィークエンドパピーウォーカーの特徴として、受刑者と会うことはないが、共に同じパピーを育てるという経験で、つながりを感じることができると考えられた。また、パピーとの別れの際にも、別れの悲しみをお互いに共有できるものと考えられた。このことは、ウィークエンドパピーウォーカーにとって、悲しみの軽減に役立つと考えられた。

日本盲導犬協会は、ホームページにて、「島根あさひ盲導犬パピープロジェクト」は、盲導犬候補のパピーを、地域ボランティアと協力しながら育ててゆき、受刑者の社会復帰の促進が期待されていると述べている。ボランティアにとって、今までに出会う機会がなかった受刑者と、パピー育成を通して同じ目標に向かって経験を共有することは、受刑者にとっての教育プログラムとして有効だけでなく、ウィークエンドパピーウォーカーにとっても貴重な経験となり、心理的に良い影響を及ぼすことが示唆される。

③の調査では、著者と本研究協力者の日本盲導犬協会の協会員とで構成される専門家チームで、キャリアチェンジ犬介在教育のプログラムにおけるキャリアチェンジ犬の介在教育への有用の可能性について検討した。その中で、盲導犬であったが、何らかの理由で早期引退したキャリアチェンジ犬の可能性について検討した。その結果、普段の生活には支障が無いが、盲導犬の活動には問題が生じると言う理由で、早期に引退した犬が向いていると考えられた。盲導犬の経験のある引退犬は、多くの様々な人と接する経験を積んでいる。したがって、盲導犬としては引退したが、動物介在教育の活動などには適していると考えられる。また、動物介在活動の内容によっては、盲導犬に適しなかったキャリアチェンジ犬の中で、動物介在活動に適している犬も存在すると考えられた。

次に、動物介在教育を行うボランティアについて考察した。キャリアチェンジ犬をひきとった飼い主を動物介在教育の実践者にすることが提案された。すなわち、キャリアチェンジボランティアが動物介在教育のボランティアを行うのである。これは、①と②の調査で明らかにされたことであるが、パピーウォーカーは社会貢献の意識が強い。それと同様に、盲導犬のボランティアに関わる人は、社会貢献の意識が高いと考えられる。そこで、そのボランティア力を有効に利用する。また、ボランティアにとっても動物介在教育を行

うことにより心理的利益があると考えられる。キャリアチェンジ犬介在教育の内容としては、盲導犬や、それに伴う障がい者理解、キャリアチェンジや早期引退に至った経緯を扱うことで、従来の動物介在教育にはなかった新たな教育的意義が見出せると考えられる。

以上から、キャリアチェンジ犬介在教育プログラムを実践するボランティアと、介在教育を受ける側の両者の心理的利益を期待できる動物介在教育プログラムの可能性が示唆された。

本研究は、心理学の研究だけでなく、動物介在活動や療法、動物介在教育、人と動物の関係、ボランティア経験が人に与える影響やバリアフリーの研究に示唆を与えると考えられる。また、教育現場における動物介在教育のプログラムとして運用できると考えられる。さらに、盲導犬の心理学的基礎データとしても有益であり、パピーウォーカー経験による心理的効果の検討により、各盲導犬育成団体が行うパピーや啓発活動犬の介在活動促進やボランティアのサポートにも役立つと考えられる。

最後に、今まで、盲導犬を早期引退したがまだ他の活動ができる可能性がある犬や、盲導犬には適さなかったキャリアチェンジ犬、それらの家族のボランティア力を有効活用する方法を開発することは、盲導犬候補子犬や引退犬の将来の選択肢を増やすことになる。このことは、日本のみならず海外の盲導犬育成に費やされる費用の有効活用や潜在ボランティア力の活用、動物介在活動や動物介在療法、動物介在教育に示唆を与え、将来ボランティア力をさらに必要とする日本の社会に重要な示唆を与えると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計4件)

①濱野佐代子、パピーウォーカーの家族と盲導犬候補子犬の関係；コンパニオンアニマル愛着絵画投影法(PACA)を用いた測定、第54回日本教育心理学会、2012年11月24日、琉球大学千原キャンパス。

②濱野佐代子、動物介在教育に関するシンポジウム：子どもの教育に動物を導入することの意義、第14回日本臨床獣医学フォーラム年次大会2012(日本動物病院福祉協会年次大会併催)、2012年9月30日、東京ホテルニューオータニ。

③濱野佐代子、盲導犬候補子犬の育成(パピーウォーカー)経験が家族に与える影響；日本と英国のパピーウォーカーの比較、第23回日本発達心理学会、2012年3月10日、名古屋国際会議場。

④濱野佐代子、角田祐子、吉川明、パピーウォーカーと盲導犬候補子犬の愛着の特徴；ペットへの愛着との比較から、第4回動物介在療法・教育学会、2011年10月15日、麻布大学。

[図書] (計1件)

①石田戠、濱野佐代子、花園誠、瀬戸口明久、東京大学出版、日本の動物観、2013、274 (pp17-70)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

濱野 佐代子 (HAMANO SAYOKO)

帝京科学大学・こども学部・准教授

研究者番号：90413137